

千葉日報社長賞

伊田樹生様/愛知県/24歳/男性/臨床工学技士/祖母にあてた手紙

伝えたいことが伝わらないのは、こんなに
も苦しいものなのです。胸の底に、言葉に
なれなかった感情が澱のように沈んでいます。
母親のいない僕にとつて、貴方は母親以上
の存在でした。家庭環境を揶揄われ、何も言
えず俯いていたあの頃の僕を、どうか許して
ください。家に帰り、声を殺して泣く僕の背
中を撫でてくれたあの手の温もりは、今も心
に深く残っています。

「樹生君は、本当の意味で人に寄り添える
人だよ」

その言葉があつたから、僕は医療の道を選び
ました。心が擦り切れそうになるたび、貴方
が僕の名前を呼ぶ声を思い出していました。

「お母さんの代わりになれなくてごめん
ね」

そう言わせてしまったことを、今でも悔いて
います。貴方からもらった愛があつたから、
今の僕がいます。冬の気配が深まるたび、冷
えた指先が、無意識に貴方の手を探してしま

います。

コロナ療養を終え、二週間ぶりに病室を訪
ねた日、貴方の瞳に映る僕が、どこか色を失
つていることに気がつきました。それでも、
言葉を失った僕の手を握るその手は、あの頃
と同じ温かさで、堪えていた哀しみが静かに
溢れました。

あの日以来、貴方に会うことが怖くなりま
した。もう言葉が届かないこと。もう名前を
呼ばれないこと。その現実を、どうしても受
け入れられなかったのです。

それでも、貴方がくれた言葉と手の記憶が
あるから、僕は誰かに寄り添って生きていま
す。ありがとうございます。

けれど、今も消えない声があります。

ねえ、お願い。最後にもう一度だけ、もう
一度だけでいいから。

僕の名前を呼んでよ。